

富山観光への期待

—中国人留学生・若者の事例を中心に—

Expectations of Tourism in Toyama The Case of Chinese Students and Youths

湯 麗敏

TANG Limin

近年訪日中国人観光客が大幅に増え続けている。それらの殆どは、日本の観光資源に対して魅力的と感じている。理由はいくつか挙げられる。距離的に近い、自然の景色が美しい、温泉を楽しめる、料理が美味しい、土産物がそろっている、社会秩序・治安も良い、サービスが良いなど。筆者は富山県在住の中国人留学生を対象にアンケートを実施し、富山の観光資源と観光施設に対する彼らの評価を分析しながら、彼らの富山観光への期待と、ほかの都市や地域にない富山ならではの独自の魅力、ニーズに合わせた観光客誘致の可能性と課題を見出すことへの考察について小論を展開する。

キーワード： 中国人留学生、若者、日本観光、富山の魅力、交流

1、はじめに

「万卷の書を読み、万里の道をゆく」というのは中国で昔から伝わる諺である。人間は本から得た知識以外に、自らの足で各地を旅行し、視野を広げ、見聞を広めなければいけないという意味である。これこそが、古代から現代までの「旅行」についての中国人の発想だと言えるかもしれない。

21世紀に入り、生活レベルが上がってきた中国人は、従来よりも多種多様な消費活動を行うようになり、特に文化的精神的な面での享受を求める傾向が強まっている。観光も例外ではない。国内旅行だけではなく、国際観光に出かける時代となった。2014年11月までに、中国本土から外国へ旅行に出かける人の延べ人数が1億人を突破した。そのうち、韓国、タイ、日本、アメリカ、ベトナムとシンガポールの六か国への訪問者数は、いずれも百万人以上を越えた。

中国旅游研究院の2014年の統計によると、膨大な外国への観光客は、リピーターが40%をしめており、また、海外での中国人観光客の消費額は2013年には1020億ドルに達しており、名実ともに世界一の観光消費国になったことが知られつつある。

こうした中で、日本を訪れた中国人観光客は2012年には143万人、2013年にはやや減少したものの、131万人にも達している。2014年については、上半期だけですでに100万人、8月末に

は154万人に達し、前年同期比増加率は88.2%になり、さらに、同年の年末になると訪日中国人観光客は240万9200人を突破したことが日本政府観光庁の最新統計により知られることとなった。

これまで日本を訪れた中国人観光客の特徴の一つは若年層が多数を占めるということであり、観光形態から見ても主に自由型の旅行スタイルが中心であって、若者たちの観光への意欲の強さが特に目を引く。このような中で、富山在住の中国人留学生を対象にアンケートを実施し、富山の観光資源と観光施設に対する彼らの評価を分析しながら、彼らの富山観光への期待とほかの都市や地域にない富山ならではの独自の魅力、ニーズに合わせた観光客誘致の可能性と課題を見出すために、以下の内容をめぐって考察を重ねていきたいと思う。

2、観光客にとって富山の人文・自然観光資源の魅力とは

中国2大経済都市の大連と上海の空港からそれぞれ直行便でわずか2時間30分間のフライトで富山に到着できることは、残念ながら今まではそれほど多くの中国人に知られていなかった。しかし、県内の大学にきている留学生や企業にきている技術研修生の数が増加するとともに、彼らの口コミで、これについての認知度は高まりつつある。このような利便性の高い交通手段があることは、観光客にとっては間違いなく大変嬉しいことである。

周知のとおり、富山の自然観光資源とは、雄大な立山連峰、落差が日本一の称名滝、美しい海岸、水資源豊富な河川、動物園、植物園、緑に覆われた富山ならではの自然、四季に彩られる変化がある気候などのことである。また、人文観光資源とは、世界遺産として登録された五箇山の合掌村、そして国宝として指定された瑞龍寺、有名な銅制の高岡大仏、歴史・伝統がある街並み、博物館、美術館、記念館、文学会館、ダム、お祭り、踊りなどがあると思うが、何よりも、勤勉で向上心が強い素朴な県民性、日本海・富山湾の海の幸、山の幸を中心にした豊かな食文化、それに治安の良さなども例に挙げられるであろう。こうしてみても間違いなく、富山県は豊富な観光資源に恵まれた地方と言えるだろう。しかし、日本の国内外では富山の知名度はどうなっているかについてまた考えさせられることもある。

3、留学生から見た富山の観光

2012年から2013年かけて筆者は富山にきている中国人留学生と一緒に県内の観光地を歩きまわり、感想を聞き、アンケートを実施した。

中国人留学生21名の富山観光に対する評価 (1)

場所	楽しかった	良かった	改善してほしい
黒部川電気記念館	15人	21人	0人
ダムのことを紹介	10人	16人	5人
トロッコ電車	18人	15人	6人
山や川、ダムの景色	21人	21人	0人
河原の温泉(足湯)	15人	15人	6人
お土産	0人	7人	14人
食事	0人	7人	14人
宇奈月温泉の街並み	0人	12人	9人

サービス	0人	21人	0人
道の駅	19人	17人	4人
ぜひもう一度行きたい	10人	0人	0人

中国人留学生 22名の富山観光に対する評価 (2)

場所	楽しかった	良かった	また行きたい	改善してほしい
チューリップ公園	19人	19人	10人	3人
世界遺産の合掌村	17人	17人	9人	5人
射水市の愛の風プロムナード	10人	22人	0人	0人

4、アンケートの結果で分かったこと

(1) 富山の観光資源・観光施設に対する満足度がおおむね高い

・黒部川電気記念館と黒部ダムについてはほぼ訪れた全員が良かったという反応であった。記念館の内部設置がとても合理的で、照明から画像や平面設計など科学的、技術的なレベルが高い記念館づくりであり、また、見学者への配慮と優しさの表れである腰掛ができる装置もあったことに男女問わず感動の声が寄せられた。

ただ記念館とダムの日本語の説明内容が難解だったとのコメントがあり、中国語版の説明装置が望まれている。

・「黒部峡谷の自然風景は絵のように美しく、いくら見ても見飽きがしない。それにトロッコ電車も大変面白くて楽しかった」という反応があった。童話の中でしか見られないような風景が現実に目の前にあり、それを実体験できるというのは、訪れる人に実に新鮮な感覚を与えたようだ。また、ホームに立っている駅員さんたちがとても親切で、トロッコ電車がホームを出てからもずっと見えなくなるまで、我々に手を振ってくれていたことが大変いい思い出になったと留学生たちが感激していた。日本の美しい自然を満喫するだけでなく、また、みずから日本人のあたたかいおもてなしの心を体験できたことが彼らの満足感を高めたようだ。

・河原の温泉足湯については、周りに座れるスペースがあったけれども、狭かったし、雨のため、濡れていたのも、結局立ったままでしか足湯に浸かれなかったことを残念がる声が多かった。そこを少し工夫して改善すれば、もっと楽しむことができるのではないだろうかという意見が出てきた。一方、宇奈月駅前に温泉噴水があり、60度ぐらいの高温「熱湯」が地下の源泉から直接に噴出されることに大歓声が上がった。なんと贅沢なことであろう！ そのうち数名の留学生から温泉に入りたいという要望もあった。

・観光地のお土産については、7人が購入したという回答。しかし、値段設定は高いと感じた。
 ・観光地のレストランで食事を取ったのは7人で、その他は節約のために各自持参して行った。
 ・宇奈月温泉を訪れた22人のうち、9人は、街並みに活気がない、お店の中が暗い、お客様を迎え入れようという雰囲気はなく、店の中に入るには勇気がいる、と答えた。そこから中国の若者たちが旅行先あるいは観光地の明るさ、にぎやかさ、楽しさを強く求めているという特徴が見受けられる。

・各地でのサービスに対しては、全員が高い評価をした。例えば、笑顔が美しい、言葉の使い方が大変ていねいなどの声が聞こえた。

・チューリップ公園の花が美しかったという声がある一方、日本にいる感じがしない、色とりどりの一面の花のほかに、日本風の景観も公園の中に一緒に取り入れてもいいのではないかと、という少し厳しめの意見も出された。さすがにいま時の若者たちらしく、単純に花を見るだけでは物足らず、空間に変化がある要素および面白さを求め、楽しく遊ぶことができるスペースがほしいということだろうと感じた。

・世界遺産の合掌造りは古い建築物群であるが、若者たちには逆に新鮮感があったようだ。保存には多大な労力がかかるため、住民の方々の苦勞がしのばれる、との感想もあった。一方、ガイドがないことを残念に思うという意見があり、もし合掌村についての作りから保存、保全における日本人の知恵とそこに展示された小道具や昔の村人たちの生活ぶりなどの詳細な説明があれば、より実感が湧き、もっと見る価値が高く感じられるかもしれないという意見があった。

・射水市のプロムナードでは、海にかけてある現代的でお洒落な大橋を自分の足で渡ることができたことに大歓声が上がった。歩きながら観光できるように配置された大橋の室内の歩道、欄干、窓、エレベーターなどの設置の仕方、装飾の仕方、さらにそこで観光客が安心安全に楽しく周りを観覧と鑑賞することができるようにとの思いが込められた細かい配慮と優しさに心を打たれたようだ。

改革開放後の中国では、いたるところが変貌しつつあり、確かに現代風の建物も多くなり、街並みもきれいになり、住民たちの憩いの場も、施設もたくさん作られた。しかし、ハード面での整備が進む一方で、ソフト面での整備が追い付いておらず、使う人のための細かい配慮が感じられない施設づくりが多いのが現実であったため、より日本のサービス精神、おもてなしの心に感服の至りとなったのであろう。

(2) 中国の若者にとって富山観光は魅力的である

一般論で言えば、富山のような自然資源が多い観光地に惹かれるのは年輩の方が多いようだが、本学の留学生と一緒に富山の観光地を回って感じたのは、若者もまた風光明媚な富山に対して、興味を抱いていることである。彼らは富山の観光資源と観光施設に対し概ね高い評価を与えた。こうした反応となったことについて考えられる理由は、以下の二点が挙げられる。

①富山を訪れた中国人の若者たちは、殆ど都会育ちであり、日常の生活環境と言え、人口密集地で、高層ビルが林立しており、広々とした自然の緑が少ない。公共バス、地下鉄、自家用車、タクシーなどがある便利な都市生活、都市文化を享受してきた一方、すがすがしい気持ちになる青空のもとで、悠然と暮らすということを体験している者は少ない。彼らは富山に来て、自然への憧れを満たすことができるのである。そのような原風景があり、さらに癒し効果を高めてくれる質の高いきめ細かなサービスと真心込めたおもてなしがあったことは中国の若者たちに非常に深い感慨を残していた。

②富山には、自然への楽しめるほかに海の幸、山の幸があり、都会では食べたくても高価で食べられない美味しいものがたくさんある。朝取りの魚、無農薬の野菜、新鮮な果物などが簡単に手に入ることは中国の都市部ではなかなか考えられないことである。「食」の楽しみは、観光にと

って、なくてはならないもの」ⁱ。本学の中国人留学生たちを例にすれば、富山に来たばかりのころは、田んぼと畑が多い富山での生活には戸惑ったことも確かにあったけれども、住めば住むほど、慣れるに従って富山が好きになり、卒業時には離れがたくなっているという者が殆どであった。富山の豊かな食文化、伝統のキトキトグルメも、間違いなく強力な観光資源であると言えるだろう。

5、魅力ある富山観光への期待

2011年の中国における大学生観光意向調査の結果を見てみると次のことが分かった。中国の大学生たちは観光への意欲が強く、観光に出る頻度が高い、旅に出る期間も長く、観光形態は自由旅行の形が主であるということである。

1200名を対象にした調査結果では、そのうちの九割の学生は観光が好きで、約二割が一年に三回以上旅行に出かけると回答している。続いて約三割の人が、年に少なくとも一回は観光旅行に出かけると回答しており、一回の旅行期間はたいてい3～7日間である。

旅行の目的については次の結果が出た。美しい風景を楽しむための旅行者は38%を占める、見識を高め、視野を広げようと思う人は29.21%、気分転換、リラックスのために旅行に出かけたのは23.80%になっている。

旅行中どんなことにお金を惜しまないで使いたいかという調査の結果では、ご当地グルメを選んだ人が一番多く75.52%、二番目に多いのは旅行先の特産土産32.53%、さらに、名勝旧跡の入場料、入館料31.23%、特色がある演技鑑賞料金27%という順であった。ⁱⁱ

以上のデータに照らしても、富山は多方面で観光客を魅了する資源に恵まれていると言えよう。「食」について言えば、山の幸、海の幸に恵まれており、また、世界遺産に登録されたような名所もあれば、古くから伝わってきた伝統芸能や祭りもある。例えば八尾のおわら風の盆祭りにわずか三日間の間に30万もの観光客が訪れることを見ても、その集客力の高さは立証されている。このような地域の伝統文化を外国人にも肌で体験してもらい、身近に地域の住民と触れ合ってもらい、にぎやかな雰囲気の中で、一緒に楽しく踊ることにより、かの地の特色ある歴史と文化、伝統と習慣を知ることができるという体験は、国内外の観光客にとって、間違いなく最高の享受であり、観光の醍醐味もそこにあるのではなかろうか。それは観光に出かける一番の目的でもあるだろう。

国際観光振興機構が実施した「訪日外国人旅行者調査(2003～2004)」を見れば、訪日外国人観光客の旅行目的と訪日動機が一目瞭然である。

順位	訪日動機	比率%
1	日本人の生活の見聞・体験	32.1
2	買い物	31.9
3	日本訪問への憧れ	29.2
4	日本食	26.8
5	自然・景勝地	24.4
6	リラックス温泉	23.1

7	歴史・町並み・建造物	16.2
8	伝統文化の見聞・体験	15.5
9	日本の近代・ハイテク	11.3

注：10%以上のもの（出典：国際観光振興機構「訪日」外国人旅行者調査 2003－2004）

では、富山を訪れる外国人観光客の旅行動機と目的は、以上示された九項目についてどんな比率になっているかは別として、観光客の求めていることは大抵同じだと思われる。日本人の生活の見聞・体験、買い物、日本訪問への憧れ、日本食、自然・景勝地、リラックス温泉、歴史・街並み・建造物、伝統文化の見聞・体験、日本の近代・ハイテク、観光先でこうしたことの見学と鑑賞、楽しい体験と触れ合いができたならば、誰もがそれは満足できる旅だと思うだろう。

さて、豊かな観光資源を保持する富山県で旅行を楽しみ、また、留学や、就職がきっかけで富山を訪れた外国人が富山に長期に滞在する傾向が表れつつある。人数が増加するとともに、課題も多く浮き彫りになっているが、何よりもこれほど素晴らしい富山というところを今後いかに効果的に情報発信するか、より多くの人々に知ってもらえるか、より多くの観光客を獲得できるかが大きな課題であると筆者は考えている。

観光客の年齢層によって見たいもの、体験したいことは多少違いがあるが、それだけではなく、観光客の見たいもの、体験したいことと、受入れ側が観光客に見せたいもの、体験させたいこととの間にギャップが存在する。そのようなギャップを埋めることが非常に重要である。したがって、ターゲットとなる観光客層の特徴とニーズを適切に把握した上で、的を絞った観光客誘致を行うことが重要だと思われる。

現状において、富山県民が観光立県に対する意識をどれだけ持っているか、は疑問視しなければならない、本気で観光立県への取り組みを行うのであれば、県民全員の意識転換が必要不可欠だ。ある調査によると、中国の若物にとっては、旅行中一番の問題となりやすいあるいは不満不安に思いがちなことは、宿泊施設と移動用の交通手段、または飲食、記念品購入ということだったという。同じ不安は富山にもある。たとえば、ビジネスホテルについて、値段設定は受け入れやすいが、部屋が小さすぎるとの声がある。公共施設の中での通信（ワイファイ）環境の整備もまだ足りない。町全体の照明が暗く、道端でタクシーを呼ぼうとしてもそもそも走っているタクシーがあまり見かけられない、それにバスの発着間隔が長く、観光地やサービス時の外国語対応もまだ不十分と言わざるを得ない。消費促進のため、海外クレジットカード使用可能な店舗を増やすことも当面の急務である。

ともかく、課題は課題として取り組んでいけば組みながら、克服できないことはない。国内外の観光客を完全に魅了できる富山の明るい未来が必ず迎えられることを筆者は信じて、期待をしている。

6、考察

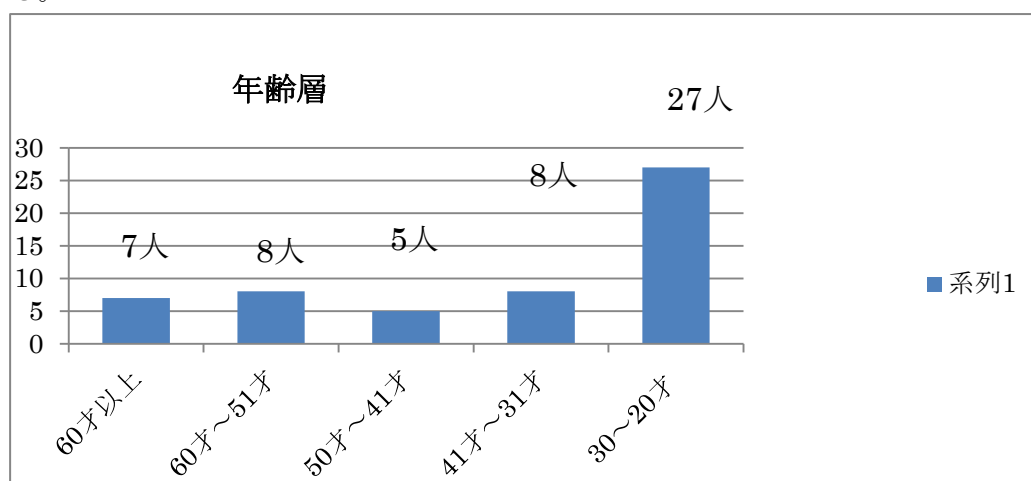
① 若者たちの観光事情を注目すべき

21世紀の基幹産業と言われている観光業を一層発展させるためには、ターゲットとなるのはや

はり未来に生きる若者たちである。若者が観光という柱産業の重要な支えになりつつあるという認識は中国では今日すでに一般的になっているが、観光立国、観光立県という方針を打ち出された日本ないし富山県では、どうだろうか？

若者たちは最も豊富な想像力の持ち主であり、現状に満足せず新しいことへのチャレンジをする力がある。常に自分たちの価値観と相応する新しいモノ・コトを探求し、発見したい、それに自分たちの要求を実現したいという希望を常に持っている。彼らの行動範囲は広く、外国へ行きたい気持ちが強い、とにかく自己主張が強い世代である。このような価値観と消費ニーズを持っている世代だからこそ、これからの観光業の大黒柱となるに違いないと、中国では大抵そういうふうに使われている。

筆者が二年前に 55 名の訪日中国人観光客を対象に実施したアンケートでは、まず性別、年齢に関する問いへの答えにより、男性より女性のほうが多く、20 代から 40 代までの若者が多く占めていることが分かった。55 名の訪日中国人観光客の年齢に関しては、次のグラフに示されている。ⁱⁱⁱ



さて、日本政府観光庁の平成 26 年度 7 月から 9 月までの統計に、訪日外国人 1 人当たり旅行支出と訪日外国人旅行消費額（国籍・地域別）四半期速報値があった。それによると、日本国内での旅行中支出のトップになっている中国人観光客の消費は、平均 1 人に 196,595 円に達していることが分かる。

したがって、若者たちを観光誘致することは、彼らの来訪により地域づくりを活性化させ、経済振興に寄与するばかりでなく、文化交流や情報発信の面でも大きな戦略的な意義があると考えられる。特に人口減少に悩む日本、とりわけ日本の地方都市では、外国人観光客の数を増やすことは、地域の経済発展と成長を確保するための重要な手段になりつつあると言っても過言ではない。

今後、できればお互いに民間交流を盛んに行うようになってほしいものである。交流を通じて、相手を知り、また知ってもらうことも大事である。その担い手としても、また若者たちに期待したい。県内には中国の大学と提携関係を結んでいる大学もあり、中国の高校と交流関係をずっと保っている高校もあるので、お互いに学びの場として定期的に行き来をすれば、学生同士の交流を深めるとともに、それをきっかけに、やがて、より多くの者が富山を観光に訪れることにも繋がることになるだろう。

②「民宿」——空き家・古民家利用に向けての工夫

富山にやってきた中国人の若者たちに富山の農家民宿、農村の民泊の体験をしてもらう体験観光スタイルを提案したい。中国では最近新しい観光のスタイルとして「農家楽」が非常に人気を博しているが、これは要するに、休暇や祝日に家族連れ、あるいは友達と一緒に田舎へ向かい田舎のんびりした生活を体験するために農家で宿泊体験をするということである。このような観光スタイルは一石二鳥の効果が生まれている。観光利用者にとって、「安らぎ」、「心の癒し」という気分転換の場となるが、一方、農村側にとっては、「農村」の荒廃、「農民」の貧困という問題の解決、改善に役立つ方法となり得る。さらに、農村地域の経済振興、農村の伝統文化と都市の人との文化交流の場ともなっている。中国の国家観光局によると、2011年末までに、中国では「農家楽」を楽しめる場所は2万カ所を超え、年間の観光客数も延べ6億人以上に上ったという。

一方、日本で持ち家率1位と言われる富山県は空き家や古民家も多く、もしそれらを外国人観光客にも利用提供ができれば、若者の集客にも寄与できると考えられる。当然のことながらそれらの運営は現実的に多くの課題も抱えるだろうが、何しろ好奇心が旺盛な若者にとっては、非日常的なことを体験できることが非常に有意義なことであり、「こうした真正の交流による感動創造こそ、『観光』から『歓交』への転換を遂げるグリーンツーリズムの真骨頂なのである。」^{iv}

たとえば、ユネスコの世界文化遺産に登録されている五箇山合掌集落の暮らしを外国人観光客も体験できるプログラムがあれば、観光客の立場からすれば大変嬉しいことではないかと思う。なぜならば、合掌造りと民謡の里である五箇山は、かつて養蚕や塩硝、和紙などの生業が営まれていたが、世界文化遺産登録された現在も相変わらず村民の生活の場であり、生産の場でもある。このことは大変珍しいことなのだが、もし外観だけを1時間あるいは2時間かけて見学していたとしても、五箇山の合掌村がなぜ世界文化遺産に登録されたのか、その意義はよく理解されない可能性がある。

厳しい自然の中で、村の人々たちは昔と変わらず農作業や家を建てることや茅を葺き替えることを行っているし、また、生活のさまざまな場面でお互いに協力し合い、助け合う精神は今もしっかり守られている。こうした、いわゆる「結」と「合力」の精神は、じっくりそこで時間を過ごすことによってはじめて理解され、その貴重さも認識されることができるのである。

もちろん、このような「民宿」の観光スタイルは、地元の住民たちがどう思うかが問題であり、受け入れてもらえるまでに時間がかかることは容易に想像がつく。そのためには、関係者相互の大きな努力が求められる。また、当事者同士のみならず、行政機関や広く県民からの支援と理解が必要であり、それを取り進めるには多くの課題があることを認識する必要がある。ただ、それでも21世紀において、観光立県を目指す富山県の目指す道として、官民一体となって取り組むに値するプログラムであることは間違いない。

誘致のターゲットを未来がある若者と定め、彼らのニーズに合わせた観光資源の開発、観光プログラムの構成を期待したい。北陸新幹線の開業で富山とほかの地域の観光客の争奪は一層激しくなる。富山はこの観光の大航海時代の「理想郷・黄金郷」として現れるかどうか、注目されるかどうか、これからも厳しい試練を受けることとなる。

なお本稿は平成 26 年度富山第一銀行奨学財団研究助成セミナー研究成果口頭発表会の報告を書き直し、論文化したものである。

注

- i 佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり』 p 140 学芸出版社
- ii 『中国青年報』(2011年12月23日) p 11
- iii 湯麗敏「中国人の目に映った富山の観光」富山国際大学現代社会学部紀要第6巻 2014年3月号 pp183-194
- iv 青木辰司『転換するグリーンツーリズム』学芸出版社 p 140

参考文献

- 1、佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり 地域づくりの展望』学芸出版、2008年
- 2、国松博・鈴木勝『観光大国中国の未来』同友館、2006年
- 3、佐々木一成『観光振興と魅力あるまちづくり』学芸出版社、2010年
- 4、藤巻正巳・江口信清『グローバル化とアジアの観光 他者理解の旅へ』ナカニシヤ出版、2009年
- 5、竹島慎二『富山県謎解き散歩』新人物文庫、2013年
- 6、中国旅遊研究院『中国出境旅遊發展年度報告 2013』旅遊教育出版社、2013年
- 7、王文亮『中国観光業詳説』日本僑報社、2001年
- 8、『中国青年報』(2011年12月23日) p 11
- 9、青木辰司『転換するグリーンツーリズム』学芸出版社、2010年